

審査の結果の要旨

氏名 張 学 智

本論文は、中国、明代の哲学史を、儒学の展開を中心に据えて多角的に研究した論文である。

中国における従来の明代哲学研究は、「宋明理学」の枠組みの下に、宋代に誕生した朱子学と明代の陽明学とを比較して両者の差異に焦点を当てたものが多く、明代を単独に取り上げて総合的に分析した研究は甚だ少ない。著者は考察の対象を明代に絞り、その三百年間の哲学の展開を、思想家の用いた概念の分析を基礎に多くの思想家たちの学説を詳細に検討することを通じて解明しており、研究史的に大きな意義を持つ企てとして高く評価することができる。

全体は導言と三十四の章とから成っている。導言では、従来の研究史に現れた諸傾向に対する批判的総括と、本論文における研究の方法的特徴が述べられている。以下、便宜的に四つの部分に分けて紹介する。

第一章～第五章は、明代前半期に活躍した儒者とその流派についての叙述である。曹端から湛若水までが取り上げられ、それぞれの学説内容の相異が簡潔に論じられている。第六章～第二十章は、陽明学の展開を扱っている。各章ごとに著名な陽明学者を一人ずつ取り上げ、その哲学の中核部分を、直接、史料を引用しながら論じている。第二十一章～第三十一章は、明代後半期に活躍した儒者の中から、陽明学を批判した人物や必ずしも陽明学に分類できない人物を扱っている。中でも、王夫之の哲学については、他の人物の四倍近い字数を割いて詳細に検討・分析を加えている。第三十二章～第三十四章は、それぞれ仏教・道教・天主教の思想動向を扱っている。著者の理解によれば、明代の思想界では儒学が中心的地位を占めたものの、仏教・道教も儒学からの影響を受けつつ独自の展開を見せたとされる。また、イエズス会士によるカトリックの伝道活動は、中国の一部知識人に大きな衝撃を与えたとしてマテオ・リッチらの漢訳著作が検討されている。

本論文の特長の第一は、その浩瀚な内容と詳細な叙述である。一人の思想家や一つの流派に限定せずに明代思潮全般を網羅的に対象として取り上げ、しかも思想家個々について

その哲学を多角的かつ精細に紹介・分析している点は特筆されてしかるべきである。そのために、本論文の総字数は中国語で六十七万字に達している。第二は、黄宗羲・王夫之のように、従来は清代哲学史において扱われてきた人物を取り上げていることである。このことを通じて、彼らの哲学の明代に根ざす由来が明らかとなり、明代の思潮がその後半、どのように展開していったかについて、見通しの利く解明がなされたと言うことができる。第三は、特に仏教・道教・天主教を取り上げてそれぞれの論述に各一章を割いていることである。従来は儒学のみを取り上げる傾向が強かったが、著者はこれらの宗教思想にも十分な注意を払って明代哲学史の全体像を提示しようと試みている。第四は、個々の思想家の哲学を紹介するに当たって、その著述を丹念かつ正確に読みこみ、紋切り型でない著者独自の観点から整理した上で読者に提示している点である。著者は、一人一人の思想家について、後代に編集された思想家の全集を通読した上で論点をまとめ直す作業を行っており、この作業には非常に大きな労力を費やしたものと推察される。

とは言うものの、本論文には問題点も存在する。一つには、本論文の論及した対象の範囲が全体として余り旧套を脱していない点である。第一章～第三十一章では、従来、言及されることのなかった思想家を新たに発掘して再評価するという類の営為が余りなされていない。二つには、各章間の脈絡が分かり難い点である。個々の思想家同士の主張がどのような関係にあるのかが体系的には語られていない。そのために、膨大な字数を費やしている割には、著者が構想している明代哲学史の全体像が読者に十分に伝わってこないのがある。個々の思想家に対する分析が細かい箇所まで及んでいるだけに、相互の関係についての記述に一層の工夫があつてしかるべきであった。

ただし、これらの問題点は、著者が明代哲学史を総合的に描くためにやむをえず犠牲にした部分であると見ることができよう。個々の思想家の主張の要点を分かりやすく提示した点を始めとして、本論文の叙述内容はその広さと詳しさにおいて研究者を裨益するところ極めて大である。日本・中国を含めて全世界的に、今後は本論文を参照することなしに明代哲学史の研究を遂行することは不可能であろう。

以上の諸点を総合して、本論文を博士（文学）の学位を授与するに十分に値するものと認定する。